



8月は一番暑い。水戸の平年値は最高気温29.6度、真夏日15.6日、夏日27.9日。雷日数は約4日だ。この時期、海や山を目指すか、夏は積乱雲=写真=が発生しやすく、落雷や突風のほか、思わぬ土砂降りに見舞われる。

1日から3日にかけて、各地で局地的な雨が降り、雷もあった。鹿嶋では夜半に雷鳴がとどろいた。関東地方の上空に、普段より強い寒気が侵入して大気が不安定になっていた。加えて、海から湿った気流が入っていたので、ひとたび日射で暖められた空気塊が上昇すると、積乱雲

2016.8.7



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

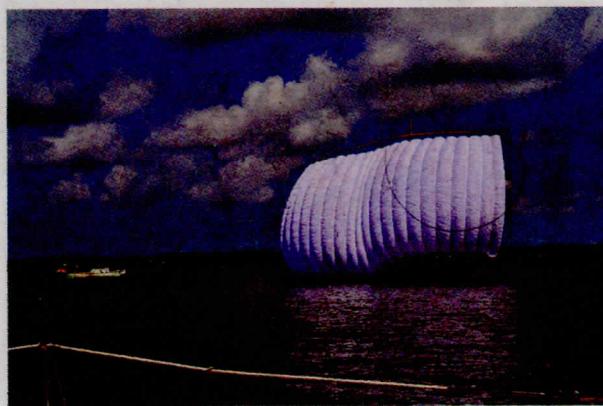
夏・積乱雲・雷

が発達しやすい環境にあったからだ。

積乱雲の上部は零下50度程度の低温だから、すべて微細な氷粒。落下の途中で氷粒が溶けてしまうのが雨で、溶けずに地表に達するのが雹(ひょう)だ。落下の途中、零下でも凍っていない水滴に衝突すると、氷粒の表面に水滴が凍りついてさらに成長し、大きな雹に。時にはピンポン玉のような雹にも成長する。

雷は積乱雲で起きる。発達過程で上部の氷粒には正電荷が、下部の雲粒には負電荷がたまる。すると直下の地面付近には正電荷が誘引される。積乱雲の負と地表の正との電位差が大きくなると、絶縁体である空気を突き破って電流が流れ発光する。「落雷」だ。雷の放電経路は極端な高温になるため、空気が急激に膨張しゴロゴロと音が出る。「雷鳴」だ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



台風は直径がしばしば千キロにも達する反時計回りの巨大な渦巻。そんな台風が北上して、日本に来る頃は東側では南寄りの湿った風と大雨、西側では乾いた北寄りの風をもたらす。台風5号は房総沖を北上したので、いっとき暑さが和らいだが、夏はこれからが本番、小笠原高気圧から吹き出す南風が関東地方にも吹きつける。

そんな夏の日、友人に誘われて霞ヶ浦の麻生漁港からヨットに乗せてもらった。「好晴積雲」と呼ばれる低い雲が南風に乗って流れ、波はダ

2016.8.14



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

夏の日

イモンドを散りばめたようにキラキラと日を照り返す。

茨城県の天気予報の区分は「北部」と「南部」に分けられているが、霞ヶ浦は西側が南部に、東側が北部にと両方にまたがっている。船長によると、霞ヶ浦の風や天気は変化も急で、気象台の予報とは異なるという。なるほど霞ヶ浦は、鹿島灘を渡る海風、筑波からの北寄りの風、九十九里からの南風がぶつかる場所だ。今の予報技術ではヨットマンを満足させるのはかなり難しい。

ヨットは音もなく湖面を滑るように波を切る。真っ白な帆をいっぱい張った帆曳(びき)船が現われた。麻生に来る途中、田は早くも立派な稲穂を付け、まるで緑のじゅうたんだった。季節は静かに秋に向かっている。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)